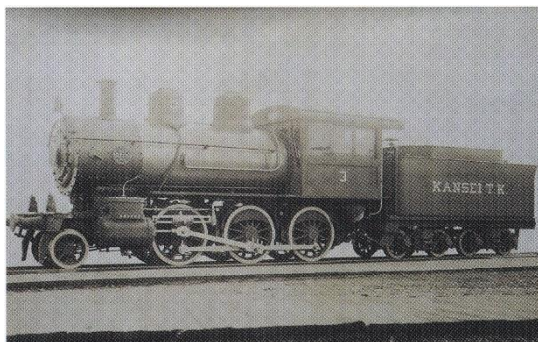


関西鉄道（かんせいてつどう）① 開設

西羽 晃

今から150年前の明治5（1872）年10月14日（旧暦、現在の暦では9月12日）に、政府は新橋（東京）と横浜（現桜木町）間の鉄道を開業させた。これは官営鉄道（以下 官鉄と書く）と呼ばれ、現在のJRの前身である。関西では神戸と大阪間が同9年5月11日に開業した。政府は太平洋沿岸は外国船からの攻撃の恐れがあるので、東京と関西を結ぶ鉄道は、最初は中山道まわりを予定した。しかし急峻な山岳地帯のため、工事が困難であり、経費も掛かるので、同19年には岐阜から名古屋を経ての東海道まわりに変更した。

江戸時代からの東海道である三重県では鉄道が通らないことになった。これに反発して、滋賀県と三重県の民間人たちが民営の関西鉄道（以下 関鉄と書く）を建設することになった。



明治30年にアメリカで製造された機関車。「KANSEI」の文字が見える
（「那波光雄」展、大垣市奥の細道むすびの地記念館 図録より）

関鉄は大津を起点として、官鉄の草津駅に接続して、滋賀県・三重県の東海道沿いを通り、名古屋までの路線をメインとして計画された。明治20年3月30日、11人の発起人により「関西鉄道会社設立願書」が滋賀県及び三重県に提出された。発起人の内訳は滋賀県が3人、京都府が3人、東京府が1人（元彦根藩

主であった井伊家)、三重県からは桑名の諸戸清六、員弁の木村誓太郎、四日市の三輪猶作、九鬼紋七の4人だった。大津―草津間は官鉄と競合するので省かれて、草津が起点とされて、同21年3月1日付けで鉄道敷設の免許状が政府から出された。

明治21年12月3日現在の株主のうち、筆頭株主は諸戸清六(船馬町)で1,000株、次が井伊直憲(東京)で500株だった。桑員地方では木村誓太郎(北大社)が300株、佐藤義一郎(船馬町)200株、内山如照(東方)140株、貝塚卯兵衛(船馬町)と梶島茂吉(京町)各90株、二井与吉(今一色北町)60株、下里貞吉(船馬町)40株、岩田彦五郎(今一色寺町)40株などで、諸戸・木村は常議員(役員)になったが、同25年には諸戸は常議員を何故か辞任している。

工事は明治21年8月に東海道本線草津駅から開始され、鈴鹿峠を避けた路線で、同23年2月19日に草津～柘植間が開通した。柘植駅は三重県で最初の鉄道駅である。当初の駅舎などの内、唯一残っているのは、レンガ造りの危険品庫(ランプ小屋)のみだといわれる。ちなみに柘植駅は三重県下では国鉄(現JR)では最初に電車が開通した駅であり、三重県下では記念すべき駅である。



柘植駅に今も残る開設当時のランプ小屋



開設頃の柘植駅

(Wikipedia から)